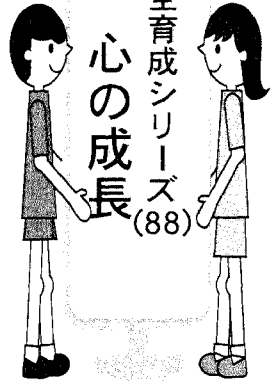


健全育成シリーズ(88)

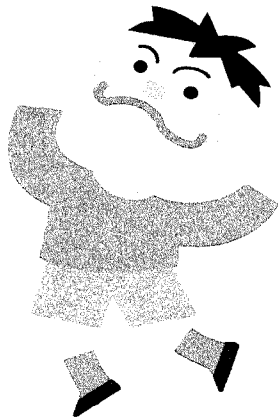
心の成長



学校でのコミュニケーションが子どもの心を育み、成長させているのではありませんか。ひよつとしてその言葉が子どもに自発性をつぶしているのかもしれない。一呼吸おいて、子どもの心に目を向けることも大切ではないでしょうか。

最近、子どもたちを取り巻く様々な出来事や事件が多く、私たちの社会はどうしてしまっただろうかと思うことがあります。そんな中、ふとこんな記事が目が止まりました。「信号待ちをしている交差点で見た美しい情景でした。車椅子の青年の不自由な足が所定の場所から離れ、体が不安定になり困っているとき、何のためらいもなく一人の女子高校生が、車椅子の青年に声をかけ、雨で濡れた歩道に膝を付け両手で足を抱え介助している姿を見ました。外見からは決して見えない女子高生生の『思いやりの心』に触れ、心やすらぐ思いがしました」。この思いやりの心とは、文字どおり、他人を思いやることであり、相手の立場に立って、喜びや悲しみを分かち合う心のことです。思いやりの心は、幼いときに母親との情緒的なコミュニケーションで養われた健全な共感性とその後の小・中学校の時代に学習される道徳的な価値観の二つの側面の融合によって形成されます。子どもは、大人たちを観察して育ちます。子どもたちの観察学習のモデルとなる大人たちが、子どもたちの手本となるような言動をとることが大切です。地域でのコミュニケーション、家庭でのコミュニケーション、

さて、もう十月を迎え、運動会シーズンとなっています。各保育園・幼稚園・小学校・中学校とも、運動会練習で忙しいのではないのでしょうか。そこで、子どもが真剣に何かをやろうとするとき、かける言葉も大切です。幼稚園や保育園の子どもは、まねることや経験することで成長し、自分の能力や可能性を実現させています。「経験する。そこで、親が（言葉を）注入する。運動会で走った。走るののがよかった。親が「何で走るの？」と聞く。子どもは「何で走るの？」と言う。子どもは「自分はのろまなんだ」という自



己概念をつくってしまふ。このようなことを『やつつけメッセージ』と言います。例えば、小さな子どもが押し入れの上段から、母親が布団を敷いているところに飛び降ります。子どもは、自分は健康なんだ、こんなことが出来るようになったんだというメッセージを送ります。さて、どう声をかけますか。「飛び降りてどうするの！」「やめなさい」と答えていませんか。ひよつとしてその言葉が子どもの自発性をつぶしているのかもしれない。一呼吸おいて、子どもの心に目を向けることも大切ではないでしょうか。

スポーツの世界に目を向けてみると、大人も子どもも心が動かされ、一瞬にして生き方を修正してしまうような言葉に出会います。今年、ジャイアンツに入団したゴルドンルーキー高橋由伸選手に、記者たちは面白おかしいコメントや派手なパフォーマンスを求めて群がりました。しかし、高橋選手の考えは、「面白いことを言ったり、パフォーマンスをするのではなく、プレーのすばらしさで認められる選手になりたい」、プロとして大切なのは口で何を言うかではなく、グラウンドでファンを魅了するプレーをすることだと言っていました。現在、外野手として一軍で活躍し、黙々と練習しファンを魅了するすばらしいプレーをしています。また、大リーグのメッツで活躍する野茂英雄投手は、評論家に「投球内容を変え、シフトや別の変化球を覚える」とスランプを脱出できる」と言われたことに対して、「僕は、直球とフォークで大リーグに挑んできた。別の球種で勝負するくらいならここに来ていない」と言ったそうです。また、オリンピックで活躍した清水宏保選手は、「僕は自分で限界をつくらない」と言ったそうです。

そこで、こんな話を語り、我々大人たちが、家庭や地域の中で子どもたちの心を育んでいけたらと思います。

伝言板

大月市大月町花咲160813

心の健康相談

あわただしい日常生活の中で、私たちは、ますます多くのストレスにさらされるようになってきました。

人と人のつながりがとぎれて、孤独な状況になったとき、あるいは世の中の流れがいつもと違って感じられたとき、人は自分の中の「正常化」に疑問を感じます。こんなときに「誰かに話を聞いてもらいたい」「よきアドバイスが欲しい」と痛切に感じることを思います。

保健所では、地域の皆さんに窓口を開き、あらゆる相談に応じています。必要に応じて、精神科医師による診察、カウンセリングおよび訪問も行っています。

痴ほう性老人

出張巡回相談

高齢化の進展とともに痴ほう性老人は著しい増加傾向にあります。

保健所では、個々の痴ほう性老人の状態に応じ、精神科医師を中心としたスタッフによる出張巡回相談を実施しています。

○秘密は堅く守られます。

○ご希望の方はあらかじめ電話で予約してください。

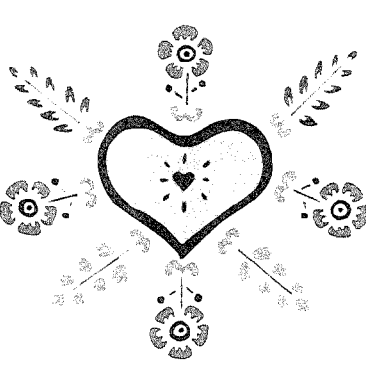
いのちへのやさしさとおもいやり
臓器提供
意思表示カード

重い病気、特に末期臓器不全に苦しむ人たちにとっての治療は、今のところ臓器移植が唯一の手段となっています。

しかし、わが国は欧米諸国に比べて臓器提供が極端に少なく、多くの患者さんが移植を待ち望んでもその希望に応えられない状況です。

臓器不全などの患者さんへの移植のため、死後の臓器を提供してもよいとお考えになった方は、ご家族の皆さんとよく相談したうえで、その気持ちを臓器移植意思表示カード（ドナーカード）などによって明らかにすることが大切です。

ドナーカードは、ご自身で必要事項を記入し、財布や定期入れなどにに入れて、携帯していただくだけで結構です。どこにも登録する必要はありません。



ドナーカードは、各市町村役場、保健所などの窓口にあります。あなたからの愛と健康の贈物として、ぜひご協力をお願いします。